



121号  
2007 / 3 / 1

日中文化交流市民サークル「わんりい」  
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>  
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp  
Eメールのアドレスが上記に変更になりました。



黄土高原の子ども 中国陝西省黄河近くの村で 2006年春節 撮影：周路

「わんりい」121号の主な目次

北京雑感その12「北京の天気」	2
私の調べた四字熟語10「 <sup>ごじゅうぼひゃくぼ</sup> 五十歩百歩」	3
「陝北女娃」19「 <sup>yànyàn</sup> 艷艷」	4
台東聖山「都蘭山」に登る(1)	6
私の四川省 一人旅4(康定)	8
中国を読む39「史記の風景」	10
「スリランカ人って?」	11
ソウルの地下鉄劇場	12
働くケニア人ママの育児事情	14
松本杏花さんの俳句集「 <sup>niān huā wēi xiào</sup> 拈花微笑」より	15
「わんりい」・新年会報告	16
「わんりい」掲示板	16

♪♪「中国語で歌おう!会」3月の歌 ♪♪

yuè liang dài biǎo wǒ de xīn

「**月亮代表我的心**」 指導：<sup>zhào</sup>趙 <sup>fēng yīng</sup>鳳英

於：まちだ中央公民館7F・ホール

JR横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分町田東急裏109ファッションビル7F

3月16日(金) 19:00 ~ 20:30

「月亮代表我的心」はとても歌いやすいのでテレサテンの歌の中でも今だによく愛唱されています。この機会に是非マスターしましょう。

録音機をお持ち下さい。

●「中国で歌おう!会」 於：まちだ中央公民館

毎月1回、主として第3金曜日開催 19:00 ~ 20:30

会費(月1回): 1,500円 体験無料

会場、日時など事前に下記事務局へお問合せ下さい。

TEL 042-734-5100

私の住んでいるマンションの窓から、CCTVのテレビ塔が見えます。テレビ塔までの間に、さえぎるものがないので、とてもよく見えます。それが、春先の黄砂の時や、初夏の朝の霧の日になると、全く見えなくなることがあるのです。

黄砂については、話に聞くだけで、完全に見えなくなるのを実際に経験したことはないのですが、夏の朝の霧ではしばしば経験しました。朝起きてみると、窓の外は真っ白で、隣の建物が辛うじてみえるだけ、200メートル程先の建物は殆ど見えません。テレビ塔はありません。いつも見えているあたりに、テレビ塔があるはずだと思って目を凝らしても、全く見えません。それほど濃い霧がかなり頻繁に発生します。この霧は、丁度、日本が梅雨の頃によく発生しますが、2006年は特に多かったようです。

この濃霧は、大抵は部屋にいて窓から眺めるだけなのですが、一度、外で体験しました。清華大学を退職された方々を対象にして、バスで北京の野生動物園へ行くツアーにご一緒させていただいた時のことです。朝出発の時は、ちょっと曇っているかなというお天気でしたが、走っているうちにだんだん霧が出てきて、北京南郊の野生動物園につくころには、視界が1メートルにも満たないような濃霧になりました。

バスは、言うようにして動物園の駐車場にたどり着きました。初めに動物のショーを見せてもらえるというので、野外舞台の前の座席に着いたのですが、舞台中央のパフォーマンスがやっと見えるだけ、舞台の後ろに控えた動物はおろか、前面のパフォーマンスも端の方は、霧のヴェールの向こうにかすんでいました。さすがにこんな深い霧は、北京でも珍しいようでした。

朝起きて、窓の外に霧を見る度に、これは本当の霧だろうかと考えてしまいます。どうも、本物の霧が、大気汚染に触発されて濃霧になるのではないかと、知り合いの中国の方は言います。いずれにしても、空気中に水分があるので、陽が出ると蒸し暑くなります。3,4年前までは、北京の夏は快適でした。日差しは、東京あたりと比べて、ずっと強いようですが、空気が乾燥しているので、日陰に入ると汗がすっと引いて、気持ち良かったものです。それが最近、日本と変わらないくらい蒸し暑くなってしまいました。

北京の気候は、6年程前に、私が北京へ行きだしてからでも随分変わりました。当初は、5月の末になると、夏の日差しが照りつけて、その強さにビックリしました。日本ではまだ梅雨も始まらない頃に、真夏のよ

うな毎日で、汗が噴出してくるのですが、蒸し暑くないので、さっぱりと気持ちのいい汗でした。その頃の私は、北京の夏の気候を聞かれるたびに、“暑いことは暑いですが、空気が乾燥しているのでしのぎ易くて、私は好きです”と答えていました。そして、北京の夏は、雨が少ないという印象でした。本当はそれなりに降っているのですが、日中には降らないで、夕方、土砂降りの雨が小一時間降って、あとはけろっと上がってしまいます。

一度、出かけている時にこの夕立にあって、その雨脚の強さに圧倒されました。“バケツをひっくり返したような”という形容がありますが、まさにそれ、或はそれ以上の勢いでした。雨宿りをしながら、どうなることかと見ていたのですが、暫くすると降り方がおとなしくなって、そのうちにふっとやんでしまいました。あとは涼しくなって、さっきまでの暑さはすっかり収まってしまいました。

それが、2,3年前からちょっと様子が変わってきました。先ず、雨が日中長い時間降ることが多くなって来ました。その頃、中国では人工降雨の技術が開発されたという噂を聞きました。そんな噂を“本当かも”と思わせるように、雨が多くなりました。ある時など、朝から雨がしとしとと降ってきて、日本の梅雨時を思い出してしまいました。私にとっては初めての感覚でした。

そして去年、2006年は、更に雨が多くなりました。去年、中国は、南の方で台風の被害が酷かったようですが、南に台風が接近すると、北京に雨が降るようで、その分蒸し暑くなりました。北京は空気が乾燥していると思っていましたのに、あの乾燥はどこへ行ってしまったのでしょうか。北京もやっぱり雨が降れば蒸し暑いのだと改めて感じました。

勿論、以前と同じように夕方から強い雷雨があることもあります。そんな時は、あちこちの道路が冠水して、交通渋滞が起きます。以前は、どんなに激しい雨が降っても、道路が冠水するのは、あまり目にしませんでした。地域の違いもあるのでしょうか、あれから何年もたって、インフラ整備も進んでいるはずなのに、見掛けほど内容は整備されていないのかしら、などと意地悪く感じてしまいます。

2005年に、“今年の夏は少し変だぞ”と思ったのですが、2006年には、今までとすっかり変わってしまいました。2007年の夏はどうでしょうか。出来ることなら、昔の“快適な夏”に戻ってきて欲しいと思います。

私達は日常、ふたつのものにあまり差がないときに、「A君の意見もB君の意見も中身は五十歩百歩だ。」あるいは、「この企画もあの企画も内容は五十歩百歩だ。」などと良く使います。

いくつかの辞書を調べますと、

「大辞林」(三省堂)：「孟子 梁惠王上」にある言葉。五十歩逃げた者が百歩逃げた者を臆病だとあざわらう意。小さな差はあるが、たいした変わりはないこと。似たりよったり。

「現代国語辞典」(三省堂)：少しの違いはあるが、たいした違いではなく、にたりよったりであること。「戦いのとき、五十歩逃げても百歩逃げても、逃げたことに変わりはない」ということから。と載っていました。

「中日辞典」(小学館)には「五十歩百歩」は見当たりませんでした。

さらにインターネットで参照したのですが、中国で出版されている辞書で「現代漢語詞典」というのがあります。

そこでは「戦国時代、孟子が梁の恵王に語った話。敵と戦っていて、二人の兵士が前線から敗走し、一人は五十歩逃げ、もう一人は百歩逃げた。五十歩逃げた者が百歩逃げた者を、役立たずと嘲笑した。これは、実際は二人とも逃げたのであって、遠近の違いでしかない。(『孟子』梁惠王・上に見える。)自分にも他人と同じ欠点や過ちがあるのに、程度が軽いというだけで他人を嘲笑することに喩える。」と説明されています。

上述のように、出典は『孟子』梁惠王・上です。

『中国の戦国の中期、梁(りょう)の国の恵王が孟子に「わしは国政には心を尽くしている。河内(かだい)で飢饉が起きれば、民を河東(かとう)へ移し、また食糧を河内へ運んでやる。河東で飢饉が起きたときもまたそのようにしてやる。隣国の政治を見るに、わしのように心を砕いているようではないが、一向に隣国の民が減って、わが国の民が増える様子がない。いったいどうしてであろうか」

孟子が答えました。「王様は戦争がお好きなようなので、戦争をたとえにしてお答え申し上げます。戦場で味方の軍の太鼓が鳴り響いて戦いがますます激しくなり、とうとう刀と刀が直接触れあうほどの接近戦になりました。あまりの激しさに武器を手放し、鎧・甲を脱ぎ捨てて逃げ出す者があられました。

ある者は五十歩逃げて思いとどまり、もうひとり百歩逃げて思いとどまったと致しましょう。この時に五十歩逃げた者が、百歩逃げた者のことを“臆病者だ！”と笑ったとしたら、王様はどう思われますか。」

恵王は「それは、笑ってはいけないうらう。逃げた歩数がただ百歩にならなかったというだけであって、逃げたことに変わりはない。ふたりの臆病に差はないだろう。」と答えました。

孟子は「王様がそのことをおわかりならば、自分の国に人々が集まることを期待してはいけないということに気付いていただけるでしょうか。つまり、自分の政治を抜きにして人々が苦しんでいることを凶作のせいにするようでは、本当の意味での善政をしているとは言えないのです。」

要するに孟子は、この喩え話で五十歩逃げたのは恵王で、百歩逃げたのは隣国の王であり、どちらも大した違いがないのだと言っているのです。孟子は、民の生活に配慮の行き届いた「仁」ある政治こそが一番と言うために持ち出した話が「五十歩百歩」であったというわけです。

#### 〈注記〉

出典：孟子 中国、儒教の経典。四書の一つ。7編。孟子の言行をその弟子が編纂したもの。宋代の朱子によって四書(『大学』『中庸』『論語』『孟子』)に列せられてから特に盛行。仁義の道を強調し、やがて仁義礼智の四端の説を確立した。日本では、易姓革命(脚注)の主張と我が国体とが相容れないとして忌避傾向もあったが、江戸時代に入って朱子学の流行と共に必読の書となった。

人物：孟子 戦国時代の儒家。魯(=山東省)の鄒(すう)の人。名は軻(か)、字は子(し)輿(よ)。前372～前289。孔子が唱えた仁に加えて義を説き、巧みに比喩を用いた優れた議論によって、戦国諸子百家の説の中に儒教思想の基礎を確立した。性善説に立ち、人は修養によって仁義礼智の四徳を成就する可能性を持つと主張し、富国強兵を霸道として斥(しりぞ)け、仁政徳治による王道政治を提唱した。亜聖と呼ばれる。著に『孟子』がある。

易姓革命(えきせいかくめい) 古代中国において、孟子らの儒教に基づく、五行思想などから王朝の交代を説明した理論。

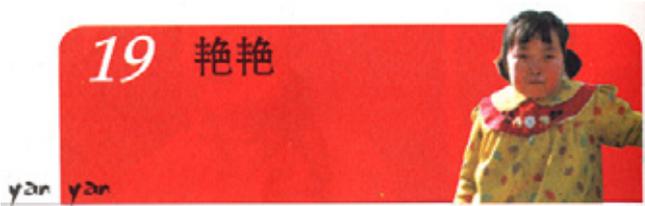
## 【私が調べた四字熟語 10】 五十歩百歩(ごじゅつぽひゃつぽ)

三澤 統

艳艳の悲しい話は、黄土高原来信・第一部でも取り上げられていますのでお読みになった方は多数いらっしゃるかと思います。人類の文明の発展は、とどまる所を知らないように進んでいるこの21世紀、母親の無知のために命を落とした少女へ深い哀悼を込めて、黄土高原と呼ばれる中国辺境の農村の現実を伝えています。

厳しい生活環境もあって、女性の教育が軽視されがちなのですが、女性にも教育が必要であることを繰り返し述べ、艳艳の物語では無知の悲劇を紹介しています。

## 19 艳艳



艳艳にはアンケートがありません。偶然に写した艳艳の写真、それも友達と一緒に、一枚の写真があるだけです。実際、艳艳は私のことを知りませんし、私もまた彼女についての印象は何もないのです。

2001年5月、私は又、伏羲河村を訪れましたが、もう夕方、しかも稊を剪定する季節でしたので村の中に大人の人影は殆どありません。私は子ども相手にふざけて、学校に行っている子ども見かけると「私のこと知っているでしょう？」などと声を掛けたりしていました。

ここには3、4回は来たことがあって自信もあったのです。案の定、遠くの方から走ってきた二人の女の子が指差しながら笑いかけてきました。私は元気になり2人に言いました。

「私のこと分かるでしょう？」

「分かるわよ」

予想通りの答えが返ってきましたので、嬉しくなり、

「写真を撮ってあげたことあるでしょう？」

私はいつも村の子供たちの写真を撮ってはあげています。それでこんな風に問いかけてみました。が、彼女達は

「ないわ！」

と頭を横に振りました。記憶の中で3人の女の子と一緒に撮影したことがありますので、写真を出して見比べ

「この子達は誰なの？」

と訊きますと、一人の女の子が、

「芳芳でしょう、慶慶でしょう、それに、艳艳！」

すると、もう一人の女の子が付け足しました。

「艳艳はいなくなったわ！」

「どうしていなくなったって言うの？」

わけが分からず重ねて訊きますと

「いなくなったっていうのは死んだって事よ」

「ネズミ捕りの薬を飲んで死んだんだよ」

「先月だよ」

二人は先を争っていました。子供たちの話はとても理解できませんし、又信じられることでもありません。

夜になってオンドルの上に身体を横たえ思い出してみまし

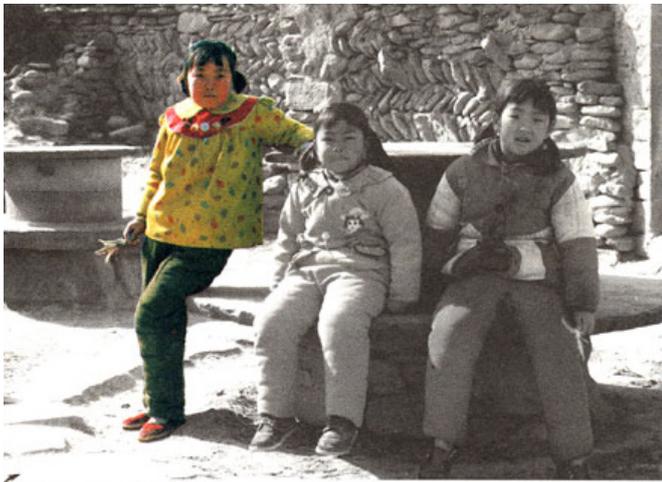
た。2000年の正月、私が伏羲河村にやって来た時、たまたま村の真ん中に人が群がっていました。老人達が日向ぼっこをしながらカルタを打っており、女の子たちが老人達の周りで小鳥のようにピーピー、チーチーと囁いて、しかも時折私にいたずらを仕掛けて来ます。私がカメラを彼女達に向けてと小鳥が飛び立つように散らばるか、身体を翻してしまうのでどうしても撮影できません。どうしようもないのでカメラを別の方に向けてや、石臼の縁に焦点を合わせました。石臼に寄りかかり三人の大人しく内気な女の子たちが、町の子どもと同じような服を着、はにかんだ様子でこちらを見ていました。私はすぐさまシャッターを押しました……。

10月のある夕方、私はまた伏羲河村を訪れました。この日は曇っていて撮影にならないので子供たちがいる学校に行き、まだ帰宅してない子供たちに、「ちゃんと渡してね」と繰り返し頼んで、この三人の女の子の写真やその他の写真を預けたのでした。三人の内のどれが艳艳なのでしょう

2日目の朝、私は村に来ると、道すがら知り合いの村人に挨拶しながら、艳艳の家がどこか訊きました。傍にいた子どもがすぐ近くだといって私を家の前まで連れて行ってくれました。艳艳の家の薄暗い窑洞に入り、暫くしてやっと家の中の様子がはっきり見て取れました。貧しく、とり散らかったままで、壊れかけた竈の上に何個かの茶わんが置かれ、竈と繋がっているオンドルの上には色褪せた布団が積まれているのでした。

私は黒くなった壁に額が掛けられているのを見つけました。右下のコーナーにはやはりあの見慣れた三人の写真がありました。指し示してもらいやっと黄色い綿入れを着て左に立っている、丸顔で賢そうな女の子こそが艳艳だと知りしました。

艳艳の母親は呆けたような顔つきで私に語ってくれました。その夜、艳艳は隣家でテレビを見て家に帰り、お腹が空いていたので、水がめの蓋に置かれてあった蒸し饅頭(小麦を捏ねて蒸しただけで餡は入っていない)を、深く考えず食べてしまったのです。しかも、それは母親が自らネズミ捕りの薬を混ぜ、水がめの蓋の周りに置いた四個の中の一個でした。母親は薬入りの饅頭を方形に並べ真ん中に人が食べる饅頭を置けばネズミに食べられないと思っていたのです。悲劇はこ



艶艶和庆庆、芳芳的合影。这是惟一的一张艶艶的照片。（左一为艶艶。）

のようにして起こりました。

僅か1時間ほどで薬が効き始め、艶艶はオンドルの上を転げまわり、喉が痛いと言いました。母親は何か食べたものが喉に詰まったかと思い、艶艶の背中を叩きましたが効果がなく、この辺りの民間療法に従って、緑豆を石臼で挽いて灰と水を加え艶艶に飲ませました。艶艶は2時間近く激痛にさいなまれた挙句に白い泡を吹き、最後に真っ黒い血液を吐くと意識がなくなりました。この時になって水がめの蓋を調べてみると薬入りの饅頭が一つ少なくなってるのに気づき、やっと原因が分かったのです。

「お腹の中はすっかり焼け爛れてしまっていました」

母親は顔中に自責と悔恨を滲ませ気の抜けたように言いました。

僅か2、3時間の内に、元気一杯だった娘を失ってしまいました。しかも極度の苦痛の中で死に至らせてしまったのですから信じられる話ではありません。聞くに堪えず私は家を出ました。艶艶は私のことは全く記憶になかったでしょう。けれどもあの写真を手にしたときはきっと驚き喜んだことでしょう。もうすっかり忘れていた通りがかりの人が送ってくれたのですから。

私は家の外に立って暫く心を静めると、また家に戻り、艶艶の小さい頃の写真を見たいと思い写真額の中を探しました。しかし、一枚もありませんでした！世の中は本当に不公平です。私は母親と弟と一緒に写し、次回来る時は艶艶の写真を大きく引き伸ばしてくると約束しました。可哀相な女の子は隣の家のテレビでほんの少しばかり外の世界のことを知ったばかりというのに、この世から早々と旅立って行ってしまったのです。

私は伏羲河村にいつもより一日多く滞在し、三日目の朝、村の学校に行きました。先生は私が艶艶のことで来ていると聞いて、「艶艶はとても大人しく、可愛い娘で、いつも一生懸命に勉強し、作文もなかなかよかったです」と興奮気味に話しました。壁の上には班の成績表がまだ張ら

れており、艶艶はそれぞれの科目で中の上といったところでした。

写真と一緒に写っている二人の女の子・芳芳と慶慶にも艶艶のことを訊いて見ました。二人はしゃくりあげながら艶艶にととても会いたいと言いました。学校の先生の話では、艶艶が亡くなって何日間か毎日、お祖父さんが懐に艶艶の写真を入れ、艶艶のカバンを提げて泣きながら学校にやって来ては艶艶を迎えに来たそうで、その時はクラスと同級生達皆が泣き、先生も泣き、学校全体がまるで泣く集団になっていたことです。

重苦しい気持ちで私は伏羲河村を後にしました。同行の現地の友人が私に言いました。艶艶が死んでから、求婚に訪れる人が少なからずあったそうで、結局、両親は艶艶を伏羲河村近くの土崗村の郝という姓の亡者の嫁に出したそうです。聞き伝えたところでは死んだのは二十年前で、当時はやっと十何歳かの少年だったそうです。しかし、生きていれば艶艶のお父さんの年齢を超えているはずです。

これは“弥婚”と呼ぶ当地の風習で、十二歳以上で、まだ結婚していない人が亡くなると、その後必ず配偶者を見つけ合葬するのです。

この風習を聞いて、心の中に一つの疑問が湧きあがって来ました。暫くためらってから恐る恐る同行の友人に訊きました。

「相手方の家はなにか結婚の約束を形にしましたか？」

「生きている人同士なら結納金があると思ったのです。」

「出しましたよ。五千元を要求しましたが、向こうは4000元支払ったそうです。」

私は何もいえませんでした。その夜は私はどうしても眠ることが出来ませんでした。

何日かした或る日、私は土崗村に行き、村人に教えて貰って静かな山裾脇に南向きに設えられた新しい墓を訪れました。そして文字のない木製の墓碑の傍らに二つのチョコレートを備えました。



新年前夕，艶艶的父母、弟弟能淡忘过去的伤心事吗？

## ■登る山の選定まで

3人グループで2007年の正月は台湾の山へ行こうと考えた。台湾には3000mを越える高峰がたくさんあり、常緑樹で覆われたエメラルド色(そう思った)の山々は、夢を誘った。どこに登ろうか? 毎度の軟弱登山隊なので、高望みをしてはいけない。乏しい情報を集めた末、ややがんばった案で台湾での最南端3000m峰「北大武山(3092m)」にねらいを絞った。その山は途中の山小屋で一泊すれば、翌日には山頂に立てるらしい。台湾最高峰の玉山などは4000m近いから冬は降雪の心配があるが、「北大武山」は3000m台やっただし台湾最南部の位置からすると積雪はまず無く、冬の天気も割合とよい。ひとまず場所を選定して安心していましたが、具体的に調べ進むと、台湾では3000m以上の登山には入山許可証が必要とか、正月は台湾も3連休になり山小屋が混雑するなどうれしくないことも分かった。山の混雑は日本で十分味わっているのもういい、「北大武山」は諦めた。

新たに目標を選定。登山道があり日帰り、冬の天気がよく見晴らしが良さそうなところをインターネットで探した。少ない候補から消去法で残ったのが「都蘭山(1190m)」だった。この山は台湾東海岸の台東市近くにあり、海岸からすぐにそそり立っている。海と反対側の山腹は「卑南大溪」という大河に削られてこちらもけわしい。南北にのびる痩せた尾根上に頂をいくつか並べた山なみである。高さは物足りないが、一等三角点とのことで、きっと風格のある山に違いないと希望的に思いこんだ。

具体案を練っていると、同行するSさんの知り合いから台湾の山岳会を紹介してもらった。その結果、ありがたいことに台湾台北の「CT溯溪会」会員の麗雲女士(少し日本語ができる、

来日経験8回)が我々に同行してくれることとなった。易しいハイキングの山を、沢登りが専門の山岳会に案内してもらうのはずかしいのだが、成り行きでそうってしまった。

台湾の山というと、日本では「玉山(昔の新高山)」が有名でほかの山はほとんど知られていない。わたしも知らなかったが、九州より小さい台湾には3000mを越える山が200座以上もあるのだ。日本には「日本百名山」という山の格付け聖書があるが、台湾にも「台湾百岳」と呼ぶ選ばれた山々があり、その選定基準は高度1万フィート又は3000m以上の山というから壮观だ。さらに各山地を代表する「五岳」や、尖鋒を集めた「三尖」など、名山群のいろいろなたえ方がある。

それとは別に誰でも登れる低山を選んだ「台湾小百岳」という分類があり、「都蘭山」もこれに入っている。

## ■都蘭山の台東市へ

台北在住の麗雲さんとは高雄の飛行場で落ち合った。麗雲さんは短髪の似合う小柄な女性で、気取らない人だった。外見からは、難度の高い沢登りをするような人には見えなかった。しかし、登攀中に落石を顔面に受け、前歯1本を欠いてしまったそうで、なかなか厳しい山登りをやっていたようだ。前歯は修復したので見た目では何ともない。彼女は食べ物の嗜好がおもしろく、ニンニク、香菜、唐辛子など刺激物、強い香りがダメ。それでも台湾人かねー、といいたくなってしまふ。

2006年12月31日、高雄駅07:11発「莒光号91」に乗車。台湾南部の線路は、峠越えの山岳鉄道となり、変化があって楽しい。台東駅に10時ちょうど到着。

麗雲さんの所属するCT溯溪会は高山なら詳しいが、台北から離れた低山の都蘭山などは眼中にないので不案内である。そこで会長の莊さんは、大事をとって地元の案内人、廖氏(れう)に案内を依頼してあった。廖氏は静かな物腰の退職教職員で、彼とは台東駅で落ち合う約束になっていた。こういった経緯は、登る当日になって麗雲さんから聞いた。

麗雲さんも廖氏とは面識がないので下車するとすぐに携帯で連絡をとりあい、駅前広場で落ち合う。麗雲さんは廖氏を「老師」と呼びかけたので、この文も「廖先生」としておこう。廖先生の車は新しいスズギの四駆で、これに我々の手荷物などを積み、最初にその日晩泊まる「台東公教會館」へ行った。

駅から10分ほどの中心街にある「台東公教會館」は公務員を優遇して泊めるところであるが、一般客も泊まれる。外観は普通のホテルと変わらない。手続きのため中に入ると、高年配のフロントマンが日本人かと訊いてきて、「雨降りお月」やわたしの知らない軍歌を日本語で披露。自分らで荷物をホテルの部屋へ運び、山の荷物だけを持って登山口へ向かった。

低い家並みが続く台東市の街並みはすぐにとぎれ、国道を北上する。10分ほど行くと道路沿いにある海辺の小公園に車を止めた。そこからは湾曲した海岸線を前景に、切り立った山並みが望まれた。これが都蘭山か。



「CT溯溪会」からプレゼントされた「台湾百岳」のパンダナ。これを土台に地図を作った。中央にゴマのようにみえるのが「百岳」の位置。



海岸の小公園からみた都蘭山、どれが頂上がよく分からなかった

廖先生が山を見ながらコースを説明するという。といっても廖先生が中国語で話し、それを麗雲さんの大まかな日本語フィルターで引っ掛け、われわれに伝える。麗雲さんは専門のガイドではないので、廖先生の説明を日本語に言い変えるのは沢登りより難しかったかも？。彼女は普段は「台湾語」の生活をしているので、「中国語」は得意でないらしいが、台湾に生まれた人は、生活に必要な語学を習得しなくてはいけない。

コースであるが簡単に言えば、海岸から直線的に伸びている尾根を伝い、鞍部にでる。そこから主稜沿いに北上し、一つ目のピークが山頂とのことであった。山頂は一つ目のピークか二つ目のピークがよく分からなかったので、折よく山をスケッチしていたSさんのスケッチブックで指さしてもらおうと、一つ目のピークとのこと。これで日本側三人が納得した。しかし、実際に行ってみると、三角点の山頂は二つ目のピークであった。くい違いはSさんの絵に問題があるのか、それとも廖先生が一つ目のピークの説明をしたのか、は謎となって残った。

説明を終え再出発。やがて国道を左に折れて隘路を山へ向かった。道は急坂で狭いがきちんと舗装してある。果樹農家がときどき現れ、民家が無くなると、やがて道路も尽きて「都蘭山」登山口に着いた。およそ標高600mくらい。

#### ■いよいよ聖山へ

車10台くらい止められる広場と、木組みの新しい展望台があった。展望台の上で登山を終えたらしい若者2人がカップ麺を食べていた。彼らに軽く会釈してその展望台に登ると間近に青海が見え、曇り空と水平線との間に平らな島、台東市沖の太平洋に浮かぶ「緑島」が見えた。山腹の木々は青々とし、空気は暖かい。

すでに11:40で山登りには遅い時刻だ。廖先生の車には、切り揃えた竹杖が5、6本積んであったので、人を連れた山登りを日常的にしている人なのだろう。麗雲さんとわたしがその杖を1本ずつ借り受け、廖先生自身は愛用の木の杖、微妙にねじれて味のある杖を使う。あとの2人は日本から持ってきた自前のストックを手にした。がっちりした体つき、温厚な廖先生を先頭に出発。

道は良く整備されていた。それもそのはず、「都蘭山」は少数民族(卑南族)の聖地だったのだ。卑南族は台東県付近に約



根節蘭と教えられたラン

1万人ほどが居住しており、独自の文化と言語を持っている。

台湾の少数民族というと、高砂族をすぐに思いうかべるが高砂族とは日統時代(日本統治時代の略、台湾ではよく使う略語、日抛時代ともいう)に日本が名付けた原住民族の総称だそう。今は「原住民族」と呼び2007年1月現在、台湾当局に公認されたもので13の民族がある(インターネット調べ)。

我々が登山した日も、卑南族とその関係者らしい人たち(廖先生に訊いたがはっきり分からなかった)が登山道整備のため入山していた。セメントをこねるための水入りポリタンクを担ぎ上げた、本格的なものだ。

登山口からしばらくは、ブルドーザーで轍いた跡がある林道めいた道だった。下山の子供連れ家族とすれ違ったので、安心して歩ける山であると確信した。この道を30分ほど行くと作業所のような小屋掛けが現れ、ブル道は終わりとなる。小屋は登山道整備の基地らしく、それらしい備品があったが、誰もいなかった。歩きながら、もしや山頂までブルドーザー林道かと心配したので、普通の登山道となってほっとした。

麗雲さんはしんがりに付いて、「初心者」を擁護するような位置を保っていたが、少しは我々の山登りの経験を認めてもらったのか、気を抜いた歩き方に変わった。だんだん傾斜がきつくなり、大きな照葉樹が茂るようになった。樹林の中の小道で暗い。林床のシダ類、梢の着床植物は、日本の山で見ると大きくたくましい。

11:20主稜上の鞍部に到着。ここで小休止。

主稜の向こう側は、切り立った崖になって落ち込んでいる。下を見ると植物が繁茂した傾斜地が、蛇行する河に向かって広がっていた。ほんの5分ほど休み、すぐに出発する。暗い林床に鮮やかなピンクの蘭が咲いている。少し進むと同じ花が次々と現れた。一株に五、六個の花を付けた、よく目立つ可憐な蘭だ。廖先生に問うと「根節蘭」であるという。だが帰ってから調べると「根節蘭」というのは属名で、種名ではなかった。

廖先生は元教員名だけあって、はなかなかな博識があり、ときどき立ち止まっては植物や地形などを丁寧に説明してくれた。

次号に続く

この旅で二度目になる康定に向うバスに揺られながら、私の心は嬉しさで踊っていた。いよいよ本格的に旅の第二部が始まるのだ。バスは懐かしい思い出の土地に向かって走り始めていた...



帰国する母たち一行と別れ、一人居残りを決意したのは、もっと深く四川省チベット圏の人々やその生活と触れ合いたいと思ったからだ。訪れる場所はチベット圏ならばどこでも良かったのだが、旅の目的地は居残りを決意した時から既に心に決めていた。

三年前に訪れた四川省チベット圏の「カム東部」と呼ばれる地方の街や村を、あの時には後ろ髪を惹かれる思いで駆け抜けた場所を、もう一度自分の足でじっくりと歩いてみたかった。未だ訪れた事の無い街や村に行ってみたい気持ちも強くあったが、一度は訪れた土地であっても、人に連れられバスで走り抜けただけの旅ではその土地の本当の姿は見えてはこない。心を強く揺さぶられはしたが、私は前回の旅にまだ納得していなかったのだ。

そしてもうひとつ私が三年前の旅にこだわっていたのは、深く心に残っていた場所があったからだ。ずっと私の心の奥に沈んでいた、宝石のように美しい湖が夢ではなかった事を、再びあの場所に訪れて確かめたかった。



成都から康定を結ぶこの道をバスで通るのは既に四度目だ。三年前の旅の往復と、今回の四姑娘山麓をめぐる旅での帰り道もこの道路を通して成都まで戻った。今では窓の外を流れる風景もところどころに見覚えがあり、一人旅の喜びで心が躍っている私には、風景までが「おかえり！とうとう一人で帰って来たんだね」と迎えてくれる旧友のように感じられていた。

嬉しくて嬉しくて、一人で車窓を眺める顔もつい笑顔になってしまう。他人が見たら、ちょっと頭のネジが緩んでいるように見えたに違いない。

途中立ち寄った休憩所の脇ではドラム缶のなかでトウモロコシを焼いていた。

「あ〜！ 懐かしい！」

三年前に初めてこの道を通った時にも食べたっけ。その時のバスには、こちらの土地出身で、案内役として私たちの旅に同行していた鳥里鳥沙氏の親戚筋にあたるという少女たちが数人同乗していた。途中の小休止でバスを降りたあの時にも、このドラム缶の焼きトウモロコシが売っていたのだ。

小銭を持っていなかった私が紙幣を差し出すと、売り



子さんは困ったような顔をするばかりで売ってくれようとしなかった。お釣りが無いのかと諦めようとした時、バスに同乗していた少女の一人が自分の一元硬貨を取り出すと、私にトウモロコシを買ってくれたのだ。

まだ幼さの残る彼女の年齢は、おそらく中学生くらいだっただろう。バスに戻ると急いで日本人の同行者から一元借りて返そうとしたのだが、彼女はどうしても受け取ってくれず、私はトウモロコシを食べながら恥ずかしくてたまらなかった....。

懐かしさもあり、飛びつくようにしてドラム缶の中で灰まみれになっている焼きトウモロコシを買う。聞いた話ではこの辺りで作られているトウモロコシは、食用というよりは家畜の餌となっているのだそうで、それはまるで石のように硬いのだが、噛み締めるとこれが本来のトウモロコシなのだろうと思える素朴な味わいで、私にはとても美味しい。トウモロコシをかじりながらこの道をバスに揺られていると、三年前の旅の思い出が次々に蘇ってきた。

この道で初めて入った街道沿いの公衆トイレ....。

それは、それなりにアジアの国々を渡り歩き、それなりに中国のトイレについての噂を聞き及んでいた私でも思わずカルチャー・ショックを受けてしまうほどに衝撃的だった。もうヤケクソにならなければ入る勇気も湧いて来ないような感じだったが、そういえば今回の旅ではそんなトイレには一度も出会っていない。ここ数年飛ぶ鳥を落とす勢いで発展している中国は、どうやら地方の僻村のトイレ事情にまで急速に文明の波が押し寄せているようだ。それはこの土地を旅する旅行者としては、快適に旅の日々を過ごせるという喜ばしい事柄ではあるのだが、その土地の本来の姿が急速に失われつつあるという一事例を

示されてもいるようで、私としてはかすかな焦りも感じてしまうのだ。

心の中で暖めていた思い出の土地は、あの時の姿をそのまま留めているのだろうか... 喜びで弾んでいた心にフッと一瞬、不安の影がよぎる。



当時はまだ道路事情が悪く10時間以上もかかった道のりが、三年の間に驚くほど改善され、バスはスイスイと7時間ほどで康定に到着した。

バスを降りると先ずチケット売り場に向かい、明日の目的地である理塘までのチケットを買った。出発時間は翌朝の6時半だ。

チケットを買い終えたら、次は今日の宿探しだ。大きなザックを担いだ一人旅ではこれが面倒なのだ。成都からチベットエリアへの中継点となる康定では、バス・ターミナルの周りにも「住宿」と書かれた看板がたくさん出ていて宿を探すのは難しくなさそうだったが、実際、思った以上に簡単に済んでしまった。適当に当たってみようと一歩バス・ターミナルを出たところで、いきなり宿の客引きに囲まれてしまったのだ。

「小姐！今日の宿は決まってるの!? 良い部屋あるわよ！目の前よ！」

客引きというとちょっと胡散臭いイメージがあり、いつもだったら避けてしまいがちなのだが、真っ先に声をかけて来たチベット人のお姉さんはキリッとしたしっかり者といった感じで、何の根拠もないが信用できそうな気がした。重い荷物を担いで部屋探しをするのが面倒だった事もあり、私は彼女の話聞いて見る気になったのだ。

宿は道路を挟んだ斜め向かいのビルの3階でバス・ターミナルの目の前だった。彼女について行くと、その宿が入っている5階建ての小さなビルは、1階が飲食店になっている他は各階にそれぞれ別の経営の安宿が詰まっていた。バス・ターミナルの入り口に集っていた客引き達は、結局みんなこのビル辺りからやって来ていたのに違いない。きっと何処の宿も設備は似たりよったりなのだろう。

一番安いという30元の部屋には窓は無く、セミダブルのベッドとTVの置いてあるサイドボードでいっぱい、いっぱいという感じだったが清潔そうで悪くはなかった。何処の部屋に泊まってもトイレとシャワーは共同だが、どちらもまあまあ清潔で、24時間使えるというシャワーも熱いお湯がまあまあ湯量で出るようだったし、私にとっては十分だ。どうせ今日一晩眠るだけの部屋なのだ。迷わず一番安い部屋に決めて荷物を下ろした。

うわ〜い。ベッドの上で伸びをする。今夜の宿もアッサリと決まって何もかも順調だ。荷物を置いたらすぐ街に出た。



四姑娘山メンバーと旅の最後を過ごしてから、ほぼ十日ぶりの康定だ。あの時には皆と一緒に過ごしたこの街に、帰りの航空券を捨てて一人で戻って来ているなんて！そんな予想外の展開が愉快で思わず笑ってしまう。スキップしたいような気分で街の中を歩き回り、あちこちの雑貨屋やスーパーに立ち寄っては今後の旅に役立ちそうな物を買って回った。

ティッシュ、爪切り、日焼け止めの入ったリップクリーム、クッキー、果物ナイフ、明日のバスの中で食べる果物...。それは必要にせまられての買い物というよりは、なにか少しでもこの街と関わりを持ちたい、そんな私の気持ちの為の買い物であるような感じだったのだが。

それにしても康定の街並みは、三年の間にずいぶん様変わりしていた。記憶の中にある古い建物は見当たらず、表通りには見覚えのない、明るく清潔なショーウィンドーの近代的な店が数多く立ち並んでいる。庶民的な食べ物屋や公衆トイレなどが集っていた街の一角は姿を消し、二階建てのショッピングモールが建てられていた。予期していたことではあったが、そんな街の変化は私には寂しく感じられた。

止められない時代の流れは、やはり確実に山岳地帯の小さな街にも迫ってきていた。



康定はそれ程大きな街でもないので勢いづいていた私がガンガン歩くと、二時間程でおおむね歩き終わってしまった。少し歩き疲れてベンチに座りアイスキャンディーを舐めていると、隣に小学生くらいの女の子の二人連れがやってきて腰掛けた。

一人の子はたった今、買ってきたばかりらしいビニールに包まれたリュックサックを膝の上に乗せていた。言葉は判らないが、女の子はそれを手に入れたことが嬉しくてたまらないらしく、リュックを見る目を輝かせ、手で撫でながら夢中で話をしていた。私は二人の様子を見ながら少し新鮮な気持ちだった。身近に子供がいなかったので詳しい事はわからないが、今の日本で子供達はリュックサックを買って貰って、こんなにうれしそうな顔をするのだろうか...。なんだかその子達がとても可愛く思えて、何か喋ってみたいくなった私は、持っていたウエストバックの中から折り紙を取り出した。

「外国に行く時は折り紙を持っていくといいよ」海外旅行に行き始めた頃の私に母が教えてくれた事だ。折り紙は日本の文化と伝統を伝え持つ美しい遊びであるし、この遊びを知らない外国人は、一枚の紙が折られていく事のみで立体的な物の形が作られていく事に、まるで手品を見るような驚きを感じるらしく、皆が興味を持って

くれる。

たとえ言葉が通じなくても、折り紙さえあれば気軽に土地の人と交流するきっかけを作ることができるので、私は海外に行く時にはいつも必ずバックの中に入れておくのだ。

取り出した折り紙で、得意のユリの花を折ってみた。いつもだったらこちらから積極的に働きかけなくても、折り紙を取り出した時点で相手の方が、何が始まるのかと息をつめて見つめてくれている事の方が多いのだが、少女達はリュックサックに夢中で隣席の外国人には気づいてもいないようだった。二人があまり一生懸命話しているので邪魔をするのも悪いような気になった私は、折り紙の花を手を持ったまま立ち上がり、散歩を続ける事にした。

しばらく行くと寺院があった。僧侶が中から出てきたので、入っても良いか確かめ足を踏み入れる。境内では小坊主達が勉強していた。本殿に入るとチベット仏教の美しい仏像が私を見下ろしていた。思わずハツとして反射的に頭を下げる。

「神様... 私をこの土地に再び訪れる機会を与えて下さって有難うございます。どうか今後の旅の安全をお守り下さい...」

私は特に信心深い人間ではないのだが、素直にこんな気持ちが入り込んで来た。ひざまずき、頭を床につけてお祈りをすると、それまで手に握りしめていた折り紙の花を祭壇に置いた。 【続く】

### 【‘わりい’の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わりい’は、会員の皆さんから寄せられた原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。皆さんの投稿をお待ちしています。

- 紙面が16pと限られていますので、掲載まで暫くお待ち頂くことがあります。また、紙面の都合で作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

## 中国を読む③

## 「史記の風景」

宮城谷昌光著 新潮文庫



ふたたび「史記」ネタである。小説家、宮城谷昌光氏が「史記」の物語を題材に書いたエッセイ集。小説家ならではの想像力が広がって、「史記」がまたひとつ違った風味で楽しめる。

「史記」は日本の歴史にも深く

影響を及ぼす名作なのだ。たとえば、織田信長。彼が若い頃、「大うつけ」として過ごしたことは有名な話だが、それは「史記」の「田敬仲完世家」にある、斉の威王が即位して9年のあいだ、戦略的にうつけを決め込んだという挿話から学んだのではないか、というのが宮城谷氏の解釈だ。

水戸光圀も「史記」を教科書にした人だった。17歳まで不良だった光圀青年、「史記」を読み、感動を受けて更正。兄・頼重を差し置いて世子になった光圀は「伯夷列伝」に影響を受け、兄の子を養子と

して水戸の家督を継がせたのは有名な話(らしい)。

明治政府の樹立に伴い、行われた「大政奉還」は、周王が武王の子ども威王に政権を奉還したイメージで提案されたとのこと。もちろん出典は「史記」だ。探していけば、日本史の重要局面のところどころで「史記」の力がもっと生きているに違いない。

「史記」を題材にしながらも、「史記」から飛び出たエピソードも。例えば、孔子の弟子、子貢について。「史記」によれば、口が達者な子貢を、孔子は高くは評価しなかった。しかし、孔子没後、子貢の弁才で語られる孔子は大きな存在となって広まることになる。もしかしたら、子貢あってこそその、現在の孔子かもしれない…。

たくさん人間が複雑に絡み合って歴史を作り、さらに後世の人たちはそこから学び、歴史を作っていく。司馬遷という一人の男が作った「史記」は、国を超えて影響を与えつづけ、他国の歴史をも作り、そしていまだに深く読まれている。

大学の授業で先生が司馬遷を最も理解しているのは中島敦だ、と話していた。中島敦は20世紀の日本の作家で、そんな彼が理解した司馬遷は国も時代の超越した人だった。

国も時代も関係なく普遍的なものとして残る…それが本当の歴史かもしれない。 (真中智子)

## スリランカ人って？

スリランカの事を全く知らない人から聞かれる質問の中で、多いのはスリランカってどんな国ですか？スリランカの人ってどんな人達ですか？といった事です。

どちらも一言で答えるのは難しい質問です。スリランカに入国して初めて吸う空気の匂い、体で感じる風の心地よさ、空港ロビーの雰囲気などは感性に関わる事なので言葉では説明できません。どうか御自身でスリランカに行って体で感じて下さい。国の概略についても地図やガイドブック、インターネットなどで調べて御自身でイメージを作ってもらう事にして、今回は僕がスリランカで駐在員として過ごした2年間に感じたスリランカの人について書こうと思います。

旅行者や研究者の方がその国に興味があって訪問するのと違って、駐在員は本人の好き嫌いに関係なくその国に赴任します。そして赴任直後から仕事をするだけでなく、否応無しにその国でその国の人達に接して生活をする事になりますから、その国への先入観や思い入れ無しにその国の人を見る事ができます。

僕が仕事を通じて知り合った人達、我家の住み込みのメイドさんとガードマン、社用車の運転手さん、両隣家の御家族、近所の人達、その他諸々の人達との付き合いを通して感じたスリランカ人ってというのは、第一に恐ろしい程に世話好きだという事です。

僕が外国人だったので特別だったと思われるかもしれませんが、仕事上では勿論の事、外国人の多い地域に住んでいたのが外国人が珍しいと思う人はいなかったと思います。僕の周りにいたスリランカ人だけなのかもしれませんが、相手の為に何かしてあげたいという気持ちが非常に強いようです。

出来ない事や知らない事でも、出来ると言ったり、知っていると言ったりしているうちに後に引けなくなって、あやふやな事を言ったりします。これが誤解を招いて、スリランカを訪れた多くの人達からスリランカ人はいいかげんだ、約束を守らない、お節介だと言われたりしていると感じていました。

第二に議論好きだということです。街中で誰か一人に道順を尋ねたとします。たちまちのうちに世話好きな人達が寄ってきて、あっちだ、こっちだと身振り手振りして世話を焼いてくれます。そのうちに、道順を聞いた僕をほったらかしにして集まってきた人達がシンハラ語で何か議論を始めてしまいます。たぶん道順について話をしているのですが、なかなか道順を教

えてもらう段にまでたどり着かない事があります。こんな時に地図を出して聞いてみても大抵の場合は無駄になります。僕の経験では通行人だけでなくタクシートの運転手さんでさえも、地図上で現在地を正確に指せる人は少なかったです。それどころか、地図を出す事によって議論に拍車をかける事になります。

社有車の運転手さんが初めての場所に行く時にさえ地図なんかは見ないで、たぶん見ても判らないのだと思いますが、先ず大まかな方向を目指して走り始めます。そして走りながら、平行して走っているバスやタクシートの運転手さんに大声で道を聞きます。その方向で良ければまっすぐ行き、違っていけば方向を変えろといった具合に微調整をしながらあまり迷う事もなく最終的には目的地のある町に着いてしまいます。

更に目的地が住所もわからないような場所でも、例えばそこが町から離れた一軒屋の様な場所であっても、目的地に着くことができます。こんな時に驚くのは、スリランカが小さな国だからかもしれませんが、どの町へ行っても彼の親戚、友達、友達の友達などがいて道を教えてくれる事です。もっとも、道を教えてもらうと同時にお互いに近況報告なんかをしていて余分な時間が掛かることには閉口します。

スリランカ人は時間を守らないとよく言われますが、日本でも時間を守らない人がいるのと同じで、スリランカでも時間を守る人は守る、守らない人は守らないだけの事です。守らない人の割合が日本の場合よりもちょっと多いので、スリランカでは皆が時間を守らないと思われる様に感じます。

スリランカで外国人が時間に関して注意しなくてはいけないのは、自宅に招待された時です。習慣として少し早目の時間を指定してきますが、言われた時間より少し遅く行けば良いだけの話です。そればかりか、どんなに遅くなくてもその日の内に行けば歓待してくれる事は間違いありません。

以上は僕が持っている印象なので、違った印象を待っている人もいます。また、スリランカの人に欠点が無いわけではありませんが、欠点を上回るだけの何かがあります。この何かに触れ、感じるためにはスリランカを是非とも訪問して下さい。そして、御自身が出来る限りの範囲で構いませんから、そこら辺を歩いているスリランカの人達を観察し、思い切って話かけてみて下さい。きっと、あなただけの何かを感じられますよ！



ソウルの地下鉄は韓国語がわからない外国人にもとても利用しやすいので、ソウルに来たときにはもっぱら地下鉄で移動をします。車体の長さは日本の地下鉄と同じくらいだとおもいますが、車幅は広く、ゆったりとした感じがします。最近ソウルを訪れたときに地下鉄の中で日本ではお目にかかれないう思いがけない光景を何度も目にし、すっかりソウルの地下鉄ファンになりました。その時のことをお話ししようとおもいます。



昼下がり、座席は埋まっていたましたが、立っている乗客は殆どいないガラとした車内に一人の若い女性が入ってきました。ジーンズに白いTシャツ姿の女子大生というような感じですが、背中には赤ちゃんを背負い、なにか思いつめたような硬い表情をしていました。その人は車内にはいってくるとすぐに縦が15センチ、横が20センチほどのボール紙に何かを手書きしたカードを全く無言のまま手早く座席に座っている乗客たち一人ひとりの膝に配って行きました。私の膝の上にも置かれたので見てみましたが、韓国語で書かれているので内容はわかりません。

隣に座っている若い男性の方を見ると、青年は一瞥してすぐに膝の上においていました。他の人たちも同様です。若い母親の様子を目で追ってみると両側の座席の乗客に書付を配り終え一呼吸置いた後に、今度はまた同じ順番ですばやく書付を回収し始めました。隣の青年の膝の上の紙も私の膝の上の紙もやはり無言のまま取ってゆきました。わけの判らないままに見ていると、向かい側の座席に座っている中年の女性が財布からお金を出しています。よく見ると若い母親の手の中にはガムが握られていました。どうもキシリトールガム2包み入りのパックのようです。

座席に座っていた人は1000ウォン札を一枚母親に押し付けるように渡しましたが、ガムは受け取りませんでした。ほんの一瞬のやりとりですがどちらも無言のままです。母親は素早くお金を受け取り、また書付を回収しながら先へ進んで行きました。今度は中年の男性がやはりガムは受け取らず1000ウォンを母親に押し付けるように渡していました。

書付を回収し終えた母親は次の車両へと移って行きました。1000ウォンは日本円にすれば120円ぐらいでしょうか。地下鉄の最低運賃が900ウォン、コンビニの

巻き寿司一本が1000ウォン、中くらいの大きさの甘い瓜が一つ1000ウォンです。



別な日に地下鉄に乗って座っていると70過ぎと思われるおばあさんがやってきました。疲れた顔つきをしています。服装は古びてはいるものの洗濯がしてあってござっぱりとし、靴もちゃんとしたズック靴をはいていました。その人もやはり手にキシリトールガムを持っていて、座っている乗客の方へ寄っていったらチャッと手の中のガムを見せています。何ごとか話しをしているようには見えませんでした。関心のない人は顔を挙げず、関心のある人はさりげなくお金を渡しガムを受け取ったり、お金だけを渡しガムはうけとらなかつたりしています。

この日は先日の若い母親のときよりもお金を出す人が多かったように思えました。このおばあさんが隣の車両へ乗り、さらにいくつかの駅を過ぎたとき一人の小柄なよぼよぼしたおじいさんが大きな袋を肩にし、手に杖を持って私のいた車両に入ってきました。杖を持つ手の先には何かパックに入ったものを持っています。どうもそれは餅菓子のようなものでした。ガム売りのおばあさん同様、フラフラと、それでもしっかりお金を出しそうな人に目を付けて近寄っていきました。

私の目の前の座席には中年女性が二人おしゃべりをしながら座っていましたが、先程はガム売りのおばあさんからガムを買っていました。今度もやはりおじいさんが近づいてゆきました。しかし彼女達は今回は餅菓子を買わずに1000ウォン札一枚を手渡していました。私は餅菓子が大好きで、しかもこのような地下鉄の中での商行為とも言えない不思議な出来事に興味が湧き、一つ買うことにして1000ウォンを出しました。するとおじいさんは2000ウォンといいました。

一瞬ビックリしましたが、隣に座っていた夫が「商品欲しい人は2000ウォン、いらぬ人は1000ウォンなのかもしれない」と解釈をしてくれたので、2000ウォンを出しました。手作りかあるいは元祖何とか餅というようなものを期待していましたがその餅菓子は工場で作られている小豆餡を求肥でつつんだありふれた餅菓子で、味も普通でした。

その車両の中で餅菓子を買った人間は私一人でしたが、1000ウォンを渡していた人は数人いました。おじ

いさんはよぼよぼ歩くわりには大きな袋を担いでいましたが、その中に餅菓子がどっさり入っていたのでしょうか。案外大勢が餅菓子を欲しがったらかえって困ったかもしれませんね。お金を出さずに知らん振りをする人が大半ですが、品物を受け取らずにお金を渡す人が毎回数人はいたことがとても驚きでした。

このような商売とも物乞いともつかない人たちが地下鉄にいるほかに、れっきとした商売を車内でする人たちもいました。ある昼下がり、立っている乗客はいなくて、座席にも空席がある車両に派手な赤と黒のストライプの上着を着た人が乗り込んできました。台車の上に大きなダンボールの箱を置きその上に更にCDラジカセを載せていて、大きな音量で軽音楽をながしています。車内に入ってまず一礼をし、それから大きな声でなにやら言いながら車両の中央にきました。そしてやおら商品を取り出し、頭の上にかざし、よく見えるようにしながら一層声を張り上げて商品の宣伝をはじめました。

ちょっとドスの聞いた声でメリハリをつけながら宣伝をする様子は縁日のときのテキヤの人たちと同じ感じでした。商品はアメリカンポップスのCDで、軽快な音楽や甘いバラード音楽を3曲ほど流していました。5曲入ったCDが6枚セットで30000ウォンだそうです。買う人はいませんでした。その時の乗客の半分以上は中高年だったので、歌謡曲のようなものであれば売れたかもしれませんね。でも乗客は誰一人不愉快そうな顔や素振りは見せませんでした。宣伝マンはやがて一礼して隣の車両へと移って行きました。別の日に同じ格好をして同じ荷物を持った人がホームで電車を待っているのを見かけましたので、組織的な販売なのでしょう。



この日までは比較的乗客の少ない日中の車内での光景だったので、当然混雑する時間はこのような商売は行わないだろうと思っていました。

ところがある夕方の混雑した車内で小さな携帯用ライトを売るおじさんに出会いました。さすがに車内を大きなカートを引き移動するわけには行かず、乗車した入り口に近いところで実演をしながらの宣伝を始めました。そのライトはクリップがついているので「指先にとめることが出来るし、帽子のつば先や服の襟のところにもつけられるし、電池も長持ち、とにかく便利」というようなことをいっていたのでしょうか。言葉はわからないのに見ている私はすっかりそれが欲しくなりおもわず立ち上がりそうになり夫におしとどめられました。そ

の宣伝マンからは少し離れたところにいたおじさんが人を掻き分けてやってきて一つ買っていました。他にも二人が買っていました。値段は2000ウォンだったと思います。

このほかに私が見たのは折りたたみ式のショッピングカート、衣類の埃よけカバーのセット、携帯靴磨きセットを売る人たちでした。靴磨きセットは日曜の昼下がり、車内には立っている人も結構いて混雑していましたが、宣伝が一通り終ると同時に買い求める人が何人もいたのには驚きました。目の前に座っていたカップルは女性が買い、隣の男性に渡していました。男性はさっと靴を一撫でしていましたが、あまり綺麗になったようにはみえませんでした。これも値段は2000ウォンでした。

どうも車内販売される商品の多くは日本では例えば100円ショップで売っているようなものがおおいような感じです。それにしても韓国の人が変わりと気軽に車内で物を買うのには驚きました。車両は10両編成ぐらいだったようにおもいますが、だいたい私のいる車両でも2・3人の人が買ったり、お金を与えたりしているので、全部の車両を渡り歩いていると一列車でもまあまあの収入になるのではないのでしょうか。



今回はソウルに5日間滞在をし、毎日地下鉄に乗りましたが、殆ど毎日車内での物売りを目にするのが出来ました。ある日はソウルの郊外にでかけるので一時間地下鉄に座っていましたが、その間3人のセールスマンたちが入れ替わり立ち替わり目の前でいろいろなパフォーマンスを見せてくれ、今度はどんなことをするのだろうとまるで劇場にいるような興奮と期待感を覚えたものです。

車内で売っている商品はどれも駅の構内や道端の露天商が売っているようなものなので、どこでも買えそうなものなのですが、列車内という閉ざされた空間の中にいる乗客は、商品を買うことによってセールスマンの巧みな話術やパフォーマンスを楽しんだ木戸銭を払っているようにも思えました。そして、なかば物乞いの人たちとお金だけを渡す人との間には一種ドライなそれでいて情の通い合いがあったように見えました。これも韓流の人と人との付き合い方なのかなと興味深く思いました。

次にソウルを訪れる時、地下鉄劇場でどんな韓流ドラマが見られるか楽しみになりました。

昨年5月長男を出産したこともあり、働くお母さんのケニアの子育て事情と日本のそれを比較してみたりして考えることが多くなった。

ケニアの子供の出生率は年々減少しているとはいえ3%を超える。都市部と農村部では格差がかなりあるが、やはりナイロビなどの都市部では、先進国のように女性の晩婚化・少子化の傾向は少しずつではあるが私の知る人の中にも多くなってきているように思う。

例えば、私の旦那の祖父は2人の奥さんがいて、それぞれに子供が10数人いるので、彼には子供が20名以上いることになる。しかしその次の彼の両親の世代になると、一桁で5～6人前後が多い。そして私の旦那世代になると（特に都会に移り住んだ場合）には、1～4人となる。

この傾向は、政府、国際機関やNGOが子供数を制限しようとキャンペーンした成果というよりは、それぞれの家族がベストの選択をしている結果ではないかと私は考える。もちろん今でも10人以上子供がいる家庭も沢山ある。つまり、一人一人に教育をきちんとさせられるかどうかによって子供の数を制限している家庭が増えてきた。

ナイロビなどの都市で働く女性の価値観も、先進国と変わらなくなってきている。ケニアで売られている女性誌「EVE(イブ)」は私も好きでよく読んでいたが、内容は日本で売られている女性雑誌の内容と大して変わらない。「キャリアと子育て」「仕事をしながら子供産むタイミング」いった特集があったりする。一緒に仕事をしたことのあるケニアの女性たちはスーツを着て、メイクをし、携帯電話片手にいつも忙しそうな感じである。彼女たちは高校や大学を卒業し、仕事に就きながら結婚・出産・子育てをしている人が多い。



そしてそれを可能にしているのが「nanny(ナニー)」と呼ばれる「お手伝いさん」の存在である。働くお母さんを持つ家庭にはほとんど「お手伝いさん」がいる。日本でお手伝いさんというと、資産家や政治家のお宅でしか見かけられない存在かもしれないが、ケニアでは、働くお母さんがいる家庭ではどんな職業であろうと

も、ナニーがいることが珍しい。

どういう人がナニーとして働いているのだろうか？一般的に十代半ばから後半くらいまでの女の子で、小学校や高校を中退・卒業した後、結婚するまでの仕事としているケースが多い。また親に高校や大学を负担する経済的余裕がないと学費を貯めるためにする仕事としていることもある。特徴的なのがケニアには53の部族がいるが、同じ部族出身で血縁関係のある家庭で働くことが多い。やはり、住

み込んでいるケースが多いので、親戚や知り合いの紹介のほうが安心できるし、スワヒリ語や英語よりも部族語のほうがお互い生活しやすいということもあるのだろう。

ほとんどが女の子であるがまれに男の子でも、「shamba boy(シャンバボーイ)」や「house boy(ハウスボーイ)」として雇われていることもある。シャンバとはスワヒリ語で「庭」を意味するので特に庭の世話をしていることが多い。この場合は、外国人や政治家のお金持ちの家で働いていることが多い。

ナニーの給料は、決して高くない。一ヶ月住み込みで一日中働いて日本円で1000円から3000円くらいの間であると思う。なので、一般に公務員や会社員としての給料が1万円から2万円くらいだとしても、日本のお手伝いさんを頼むよりは遥かに経済的負担は少ない。

彼女たちは確かに若い女の子が多いが、その働きぶりはプロフェッショナルである。幼いころから家事・育児を家庭で当たり前のようにするケニアの子供たちは、小学生も高学年くらいになると、お母さんと同じように家庭の仕事を一人でこなせる。ナニーとして一日中、家にいてお母さんがやっていることのすべてを一人でやるのできるのである。買い物、掃除、選択、料理、育児、また来客がある場合にはその食事の面倒まで制限なく仕事ができるのである。

私のいた孤児院にも保育園の先生がいたが、彼女もナニーを雇い、小さな子供がいてもいつも通りに仕事をしていた。その生活ぶりは私にとって理想だった。家事が滞ることなく家はいつも美しく、子供もナニーになつき、彼女は仕事や所属している教会のボランティア活動をし、洋服の仕立てをしている旦那の店を手伝いつつ、空いた時間や夜、週末子供と過ごし、まさに自分の人生を自分でデザインしている、と感じたものだ。いつ子供を生み、いつまで休み、いつから仕事に戻るといった、日本なら、会社や保育園の都合に合わせてところを、自分の都合で合わせていけるその柔軟性と自由さ。子供にとっても地域やいろいろな人の目や手で育てられるということもあり、小さなときから社交性を身に着けることができるように思う。

遠くアフリカで、女性は人生を自分でデザインしている。後進国と呼ぶにはためらうような女性のいきいきとした現実がそこにはある。先進国と呼ばれる日本で、「仕事は続けたかったけれど…」という声を沢山聞くし、やはり結婚・出産をきっかけに専業主婦として家庭に入る女性のほうが多いことも事実だ。それも女性の人生としてすばらしいことではあるけれど、大切なのは「選択肢があること」であると思う。

建前では外国人を雇用しなければ日本の産業が維持できないとか、国際化を推進するとかという日本政府ではあるけれど、本音はなるべく外国人を入国させたくない日本。国レベルで少子化が問題視されながら、産婦人科が少なくなってきたり、保育園や幼稚園も足りない地域も多くあるという。そういう施設の充実も大切だが、私の意見としては、是非プロフェッショナルなお手伝いさんを外国から雇えるような「nanny visa」を発給してもらいたい。

現実にさまざま国でナニーは仕事をして認められ外国に出稼ぎしている。いい面も悪い面もあると思うが、きちんとした雇用として家庭で是非働けるチャンスがあれば、私もナニーもそしてなにより家族全員が豊かに自分の人生をデザインしていけるのではないかと思う。

松本杏花さんの俳句 niān huā wēixiào 《拈花微笑》より

春宵や故城鎮もり三日の月

chūnxiāo chùchù yōu  
春宵处处幽  
gù chéngjiù zhènshuí xiāng shǒu  
故城旧镇谁相守  
chū sānyuè rú gōu  
初三月如钩

春色迷人、春宵尤撩人。在那繁星与新月争辉的夜空下面、故城旧镇的苍老轮廓一如往昔、朦胧有致。白日游览的新城新镇、充满现代化气息：商业街车水马龙、娱乐场所喧闹杂沓……

人们都涌向新城了、谁还光顾老城？只有天上的月亮、还一如既往地与此沉静的故镇长相厮守。

本诗中的初三、是指正月初三。

立ち膝の観音の眼にある春愁

tíng tíng lì lián tái  
亭亭立莲台  
cí yán guānyīn yǎn wēi kāi  
慈颜观音眼微开  
yì yǒu chūnchóu āi  
亦有春愁哀



记得小时候去大佛殿总感到害怕、因为觉得大佛像的眼睛一直盯着自己。其实、那只是佛像高大、双眸俯观的缘故。只要人在其下、总在那目光的盯视范围。

此句中观音菩萨的目光、实际上就是作者的目光。自己胸中泛起春愁、观望观音的双眸时也发现有春愁。说穿了、观音的目光只是一面镜子、反映出了观音者的内心世界。

## ‘わんりい’2007年新年会、賑やかに盛り上がりました！

‘わんりい’恒例の、シュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)新年会が、春節に先駆ける2月4日(日)麻生市民館・料理室で開催されました。40名を越える参加者たちは頬を緩めてシュワンヤンロウに舌鼓を打ちました。

10kg以上用意の羊肉をしっかりとお腹に納めた後は、馬頭琴の演奏、中国琴の演奏、「北国の春」を中国語で歌い、ビンゴやお笑い福引で盛り上がり、2007年度の新年を祝いました。‘わんりい’の活動が始まって今年は15年。この間、活動を通していろいろな出会いがありました。そんな出会いを懐かしんで遠路お出掛けくださったメンバーや関係者の方々も交えて終始、まるで同窓会のような和やかさでした。

また、‘わんりい’のメンバー達と一緒に山西省を旅したり、‘わんりい’に山西省各地の紹介記事を寄稿下さったりと、会に関わりの深い山西省中国国際旅行社副社長の黄玉雄氏が山西省旅遊局局長と共に山西省旅行のPRで丁度東京に見えており、‘わんりい’の新年会の催しを聞いてご参加という思いがけない来客もありました。(田井)



▲ TOKYO 万馬馬頭琴アンサンブルの永瀬征博さんと池谷禎俊さん



▲ 「北国の春」を中国語で歌う「中国語で歌おう！会」の趙鳳英さん(左から2人目)とメンバー達



▶ 中国琴の演奏を披露くださる何媛媛さん

## 《‘わんりい’掲示板》

### 【ご予約下さい】(詳細は4月号)

hé yuán yuán シャールピン  
1)何媛媛さんの手づくり餛飩餅で交流しよう！

2007年4月15日(日) 15:00～17:00

於：鶴川市民センター・第二会議室

小田急線鶴川駅バス鶴川支所前下車0分

参加費：2000円 15名から20名(申込制)

\*参加は会員と会員関係者のみです

2)任書剣ドキュメンタリー映画再上映します！

「北朝鮮の夏休み」(2004年制作 75分)

2007年4月19日(土) 19:00～20:30

於：まちだ中央公民館・視聴覚室

JR横浜線町田駅ルミネ口下車徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分

参加費：無料 先着：36名(申込者優先)

申込&問合せ：TEL/FAX 042-734-5100‘わんりい’

E-mail:wanli@m2.ocv.ne.jp

まちだ国際交流センター/日本語部会：子ども教室

講演会「日本語以外のことばを母語とする子供たちが、  
どう日本語を学んでゆくか」 無料/当日参加可

2007年3月10日(土) 13:30～15:30

於：町田国際交流センター・講習室

JR横浜線東急ハンズ口下車徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩7分/町田市フォーラム4F

講師：清田淳子(お茶の水女子大学で「日本語非母国語話者年少者教育学」講座開講)

申込&問合せ：町田国際交流センター

TEL 042-722-4260 Fax 042-722-5330

‘わんりい’のおたより会員継続のお願いとお誘い  
年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

毎年、4月は‘わんりい’おたより会費更新月です。3月一杯に継続会費(1500円/年)の納入(上記)をお願いします。新規入会も歓迎します。

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催しています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行しています。

入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

3月定例会 3月12日(月)

4月号おたより発送予定日 3月28日(水)

共に田井宅 13:30～ どなたでもご参加で来ます。